

記録された殿様の言葉―藩主から藩士への「御意」

殿様（藩主）は、普段、家臣たちへどのような言葉を掛けていたのでしょうか。彦根藩では、藩主の意向および発した言葉は「御意」と呼ばれました。藩主の行動内容が窺える史料では、多くの場合、「御意有之」とのみ記され、実は、藩主が実際に何と言ったのかは書かれていないのです。

わずかながら、藩主の発した言葉をそのままに記す史料があります。それが「御意書付」です。これには、藩主が掛けた言葉とともに、言葉を掛けられた藩士の名前などが記されています。

江戸時代後期の作成と考えられる「御意書付」がいくつか確認できますが、そのほとんどは彦根城表御殿の公的な場面での記録です。例えば、藩主が藩主に初めて御目見した際には、「藩主から「初而目出度（初めてめでたい）」と言葉を掛けられています。また、藩士が江戸へ下る際には、その名前が披露された後、藩主から「下ルカ（江戸へ下るのだな）」

と言葉を掛けられています。このように、公的な場面における御意は、多くの場合、極めて短い表現でした。また、藩主は江戸に出立する際、見送りに出てきた家老（家臣のうち最重職）へ、「随分無事テ居ラレ（しつかり無事おられよ）」、中老（家老の次席）へ、「発足致ス、無事テ居ヨ（江戸へ出発する。無事で居よ）」と言葉を掛けています。一方、その他の藩士には、「出タカ（見送りに出てきたな）」と伝えていきます。ここで注目されるのは、相手によって掛ける言葉が異なっていた点です。また、家老に対しては、敬語が使われています。ここには、藩士の序列が反映されていたと考えられます。

また、「御意書付」の中には、藩主が藩士を招いて行った宴席の場を記録したものもあります。井伊家十二代直亮が、御座之間（藩士の執務室）に隣接する張出之間で、家老一同へ酒や蕎麦を振る舞った際のもので、（写真）。当時の彦根藩では、対処すべき課題が山積しており、こ

の宴席は、それに対応する家老たちを招いたものであったと考えられます（「打続キ心配ノミノ事ジャテ、今日ハ蕎麦ヲ申付タ」。藩主から家老へ酒が振る舞われた際には、「気詰リデナイ咄ヲシテ、精ダシテ酒ヲタベラレ（気兼ねしない話をして、たんと酒を飲まれよ）」と言葉を掛け、さらに、同席していた侍講（藩主に学

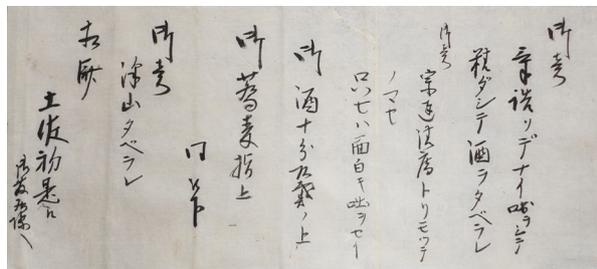


写真 御意書付（部分、彦根藩大久保家文書、当館蔵）

問を講義する役職）の伴只七（東山）に、「只七八面白キ咄をセイ（只七は面白い話をしなさい）」と命じて、宴席が打ち解けた雰囲気となるように気に掛けていたことが窺えます。直亮は、家老たちに酒などを振る舞い、彼らを気遣う言葉を添えることにより、彼らを慰労しようとしていたのではないのでしょうか。

このように、彦根城表御殿の公的な場面で藩主が掛ける形式的な言葉からは、彦根藩の儀礼の一端が窺え、御座之間で近しく藩士をもてなす際の言葉からは、藩主の心持ちを垣間見ることができます。「御意書付」は、彦根藩主の実像に迫る糸口を与えてくれる史料といえるでしょう。

【彦根城博物館学芸員 柴崎謙信】

写真の作品は、常設展示「古文書が語る世界」で2月22日（土）～4月20日（日）の期間、展示します（3月11日（火）、17日（月）～19日（水）は休館）。